

## 教室の内外(4)

——『伊勢物語』・『枕草子』・『源氏物語』・『和泉式部日記』・『小右記』——

吉 海 直 人

【キーワード】東下り・翁丸・葵祭・小舎人童・この世をば

『伊勢物語』九段「東下り」を読む

—

高校の古文でお馴染みの『伊勢物語』九段は、大きく三つの段落に分けられている。第一段落は、冒頭の「昔、男ありけり」から「みな人、乾飯の上に涙落として、ほとびにけり」まで。第二段落は、「行き行きて」から、富士山の説明として「なりは塩尻のやうになむありける」とあるところまで。第三段落は、「なほ行き行きて」から、末尾の「舟こぞりて泣きに

けり」までである。それぞれの段落には必ず和歌が含まれており、まさに和歌を核とした歌物語であることが納得される。

高校での学習はそれでいいのだが、実は九段には成立に関する大きな問題があった。片桐洋一氏の提唱されている三段階成立論を参照すると、基本的には古い第一次成立の『伊勢物語』に分類されていた。ただしそれは第一段落と第三段落のことであり、真ん中に位置する第二段落は後期補入とされている。ややこしいようだが、そのことは各段落にある和歌の出典を調べれば一目瞭然であった。

九段には和歌が四首含まれているが、第一段落の「唐衣」歌と第三段落の「名にし負はば」歌は、ともに『古今集』所収の業平歌なので、なんら問題はなさそうである。それに対して第

二段落の「駿河なる」歌と「時知らぬ」歌の二首は、『古今六帖』にこそ収録されているものの、『古今集』所収歌でも業平歌でもないので、明らかに異質というか出典や成立のずれが認められそうである。

これはあくまで和歌の出典による便宜的な分類ではあるが、他の要素からの分析によっても、それは極めて有効だとされている。要するに九段は、古い第一段落と第三段落の間に、後から第二段落が挿入されて現在の形になっているわけである。

## 二

そのことを踏まえた上で、第一段落をあらためて詳しく見てみよう。冒頭には「身をえうなきもの」に思いなした昔男の、「京にはあらじ」という強い意志が表明されている。同様のことは既に「京にありわびて」(七段)・「京やすみ憂かりけむ」(八段)と連続して語られており、七・九段が一連のグループ(東下り章段)であることが看取される(ただし昔男の思いの強さに強弱がある)。

その具体的な行動として、「東の方に住むべき国求めに」とあるが、これも「あづまにいきける」(七段)・「あづまの方に

ゆきて」(八段)と連続していた。こちらはさらにその後にも「武蔵の国までまどひ歩きけり」(十段)・「あづまへゆきける」(十一段)・「武蔵野へ率てゆくほどに」(十二段)・「武蔵なる男」(十三段)・「陸奥の国にすずろにいたりけり」(十四段)・「陸奥の国にて」(十五段)と展開している。場所的な関連から言えば、七段から十五段という一かたまりが、いわゆる東下り章段ということになる。<sup>(1)</sup>

これらは原初的な成立の九段に吸引される形で、増補を繰り返す中で増殖していったと考えられている。しかしながら何故東国に下らなければならぬのか、という昔男の精神的な理由(心の叫び)は徐々に希薄になっている。七段の「ありわびて」にしても、九段の「あらじ」と比べればかなり意志が弱くなっているし、八段の「京やすみ憂かりけん」など推量表現(草子地)にまで退化しているではないか。

ところで、ここに配されている「唐衣」の歌は、「折句」という和歌の技法を用いたもので、「か・き・つ・ば・た」という五文字を見事に各句の頭に置いて詠んでいる。しかも序詞・掛詞・縁語がずらりと並んでおり、歌人業平の面目躍如といった感がある。しかしその技法の見事さだけに目を奪われてはな

るまい。歌の最大のポイントは「つましあれば」だからである。歌題とされた「旅の心」は、そのまま望京の念として表出している。昔男は自らの強い意志で京を捨てたはずなのに、東下り譚の最初の歌からして、京に残した「妻」のことが想起されていることに留意したい（後ろ向き）。それが「もとより友とする人、ひとりふたり」の共感を誘い、「乾飯の上に涙落として、ほとびにけり」というかなり誇張された滑稽な落ちとなっている。

京に残した妻については、『伊勢物語』の配列を廻ることで、三段く六段で展開している二条の後（高子）との悲恋・禁じられた恋との関連が想定される。それは九段の第二段落で、昔男が手紙を託した相手の女性に、「その人の御もとに」とさりげなく尊敬語が用いられていること、あるいは第三段落にある「京に思ふ人なきにしもあらず」からも察せられる。要するに東下りは、昔男の失恋に起因する旅（センチメンタルジャーニー）だったとも読めるのである。

### 三

続いて第二段落について見てみよう。第二段落はさらに二つ

に分かれている。それは「駿河なる」の歌を中心とした話と、「時しらぬ」の歌を中心とした話である。ここで問題にされるのが「修行者会ひたり」である。かつては昔男が話の中心ということで、「に」という助詞がないにもかかわらず、かなり無理をして「修行者に会った」と訳されることが多かった。

最近では修行者を主語として、「修行者が昔男に会った」と訳されている。それに続いて「かかる道は、いかでかいまする。」と言ふを見れば、見し人なりけり。」とあるのだから、昔男は修行者から声をかけられるまで、相手に注意を払っていなかったことがわかる（「なりけり」に注目）。ここで大事なことは、東国へ下る昔男と修行者がすれ違う点である。修行者はこれから京へ戻る（上る）からこそ、昔男は京への手紙を託すことができたのだ。

続いて一行は、富士山を眺望する。「五月のつごもり」というのは、旧暦では夏の盛りである<sup>(2)</sup>。それにも関わらず、富士山には雪が積もっていた。それが残雪であることもわからず、眼前に見える雪は、当然直前に降ったものと認識したのであろう。そこで「時知らぬ」と言い、「いつとてか」「雪の降る」と歌っているのである。なお、他の三首には京への思いが込められて

いるが、この歌にはそれが一切見られない点も、業平とは無関係の歌であることを匂わせている。

さて「時知らぬ」というのは季節はずれという意味であるが、言語遊戯として「不時(ふじ)」が籠められているのかもしれない。もともと富士山は『竹取物語』で「士に富む」という地名起源説が提示されているが、それ以外に「不尽(つぎず)」、「不二(ふたつなき)」などの意味を掛けることも可能であろう。平安朝文学は言語遊戯の宝庫なのである。

面白いのはその後である。平安朝の貴族で、実際に富士山を見た者はほとんどいないはずである(絵で見ることは可能)。そのため『伊勢物語』は、富士山についてなんとか読者に説明しようとしている。「なりは塩尻のやう」というのは、山の姿の形容として首肯できる。ただし標高八四八メートルの「比叡の山を二十ばかり重ね上げ」たら、とんでもない高さになってしまう。これはあくまで誇張表現と見たい。

一番のポイントは、「ここにたとへば」である。古文の教科書でも、最近はこのことを学習の手引きで設問としているものが少なくない。「ここ」は、普通だった昔男がいる場所だが、それでは富士山の説明になるまい。この場合は読者の視点に立

脚しての「ここ」である。しかもこの読者とは、富士山の高さを説明するのに用いた比叡山の高さがわかる人でなければ話にならない。これはいわゆる草子地と見ることもできそうだ。

これによって『伊勢物語』の読者としては、日常比叡山が見えるところに住んでいる京都の人に限定されることがわかる。逆に言えば、比叡山が見えないところに住んでいる人は、読者とはみなされていないわけである。私は九州で生まれ育ったが、そんな差別を含む文学であったことにはまったく気づかなかった。

その昔男は、冒頭では「京にはあらじ」と言っておきながら、読者に「東の方」の人は想定されていないのである。そのことによって、捨てたはずの京都の価値観から脱却できていないことが露呈されることになる。それは『伊勢物語』に限らず、平安朝の文学すべては不平等(差別的)なものなのだ。身分的には貴族が対象であるし、地域的には非常に狭い都中心(京都至上主義)だからである。京都に住む貴族階級以外の人は、当初読者として想定されていなかったことを忘れてはなるまい。

#### 四

昔男の精神（みやび）は、第三段落にも引きずられている。その前に渡し守の「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」という発言について一言。「暮れぬ」の「ぬ」は完了の助動詞だが、どうもまだ日は暮れていない（暗かったら都鳥も見えないはず）。ここは「早くしないと日が暮れてしまう（しまいそうだ）」と訳されている。そのためこの「ぬ」は完了・強意ではなく確述とされている。なかなか難解な「ぬ」である。

さて船に乗った昔男の一行は、川で遊ぶ見慣れぬ鳥に目が留まった。その時の第一印象は「京には見えぬ鳥」とやはり京都視点である。だからこそ同じく見知っていないであろう読者に対して、「白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる」と具体的に色や形を説明（描写）しているのである。ここでも富士山同様に「京」が判断の物差しとなっていることに留意したい。

そこで地元出身であろう渡し守（船頭）に鳥の名を尋ねたところ、即座に「これなむ都鳥」という答えが返ってきた。このぶつきらばうな物言いは、その裏に「都鳥も知らない田舎者め」という侮蔑の気持さえ感じられる。京都から来た昔男一行

が知らないのに、言い換えれば都にいない鳥なのに、都鳥という名を持つ鳥が東国（田舎）にいるというのは奇妙なことである。だからこそその言葉を耳にした途端、昔男は望京の念を想起することになる。

自ら京を捨てて東下りに出立した（反貴族的行動）にもかかわらず、である。鳥の名に触発されて、昔男は「名にしおはば」と歌を詠みかける。その呼びかけは、もちろん都鳥には通じない。それは昔男と同じ境遇にいる友人達の心を揺さぶり、「舟こそりて泣きにけり」となる（そこに船頭が含まれるかは疑問）。ここでの涙は共感の証であった。もちろん読者の共感も求めているはずである。結局、昔男の旅は、京都以外では住めないことを確認するための、後ろ向きの旅でしかなかった。<sup>(3)</sup>

なお、かつて都鳥（ゆりかもめ）は間違いなく京都では見かけない鳥だった。ところが異常気象のせいか、海（大阪湾）からかなり内陸に入った賀茂川（四条大橋付近）でも見かけるようになった。最近は餌付けまでしているようなありさまである。それはそれでやむをえないのかもしれないが、『伊勢物語』を愛好する者としては、いつまでも「京には見えぬ鳥」であってほしい。そして私がそうであったように、わざわざ上京して隅

田川のほとりで都鳥を発見してほしいと願っている。

〔注〕

(1) 参考までに『図説日本の古典5竹取物語・伊勢物語』所収の片桐洋一氏の御論によって、七段と十五段までの成立を分類すると以下のようになる。

第一次成立 九段の一部

第二次成立 十段

第三次成立 七段・八段・十一段と十五段

これを見る限り、東下り章段の大半は第三次成立の後期補入ということになる。そういった複雑な成立過程は、もちろん高校の教科書では完全に捨象されている。

(2) 第一段落の「かきつばた」が初夏であるとすれば、ここに至るまでに二か月近く経過していることになる。

(3) その意味では、隅田川は境界線ということになる。川を渡れば向こうは外国同然なのだ。そのぎりぎりのところだからこそ、「都鳥」という名が強烈な印象たりうるのである。どうやら昔男一行は、川を渡ってはいるものの、ここから都に引き返しているのではないだろうか。

『枕草子』の「翁丸」を読む

序

古代文学研究会の雑誌「古代文学研究第二次」十八号に掲載された大洋和俊氏の「枕草子の翁丸をめぐって——王権・転生・救済——」という論文の合評会(平成二十二年七月)において、非常に活発な質疑が行われた。会員の一人としてそこに参加している間に、いろいろ考えたことや思いついた点があるので、忘れないうちに書きとめておくことにした。

そもそもこの章段は「上に候ふ御猫は」(新編全集38頁)云々と書き出されており、いかにも猫が主役のように見えるが、全体を読むと間違いなく犬のウエイトの方が重くなっている。という以上に、これほど筆を費やして犬を描いている作品は他になさそうなので、むしろ犬を主役にして「翁丸」章段とすべきであらう。

ちなみに『源氏物語』では、正編に犬は一切登場しておらず、宇治十帖(浮舟巻)においてかろうじて犬の鳴き声が描かれているにすぎない。要するに、『源氏物語』中に実態としての犬は登場していないことになる。若紫巻に「犬君」という女童が

いるが、これにしても童名であるし、しかも実態は不在である。ひよっとすると紫式部は犬嫌い（猫好き）なのかもしれない。

—

もちろん「翁丸」という犬は単独の登場ではなく、「猫」との対比構造となつている。その猫にしても普通（国産）の猫ではなく、当時稀少価値の高かつた唐猫である。ただし輸入品なのか日本で産まれたのかは不明。ここでは同じように名前を与えられてはいるが、犬は男性的な「翁丸」、猫は女性的な「命婦のおとど」となっている。なお「翁」とあつても、本当に老犬かどうか、また雄犬かどうかは定かではない。恐らく「翁」には祝儀的な意味合いが籠められているのであろう。ここでは「牛飼い童」に近い存在（記号）と見ておきたい。

対する猫は天皇のペットとして飼われるということで、どこまで冗談（本気）なのかわからないが、「かうぶりにて、命婦のおとど」（38頁）と五位に叙せられており、「命婦」（員外官）という官職まで与えられていた。たとえ動物の猫であっても、宮中に昇殿するためには殿上人の資格が必要なのだろうか。それに対して翁丸は地下人ならぬ地下犬である。これだけ見ても

両者の待遇（身分）の差は明らかであった。要するにここには身分差という問題が潜んでいるのである。

そもそも『小右記』長保元年（九九九年）九月十九日条の、

内裏の御猫子を産む。女院・左大臣・右大臣産養の事有り。衝重・堀飯・納宮の「衣等」有り云々。猫の乳母、馬の命婦。時の人之を咲ふ云々。奇怪之事、天下以て目す、若しくは是、微有るべき歟。未だ禽獸に人の礼を用ゐるを聞かず、嗟呼。

（大日本古記録『小右記』二 61頁）

を参照すると、長保元年九月に内裏の「御猫」（お猫様？）が出産しており、それを祝つて詮子・道長・顕光が産養の儀式を行つたらしい。<sup>(1)</sup> 冗談みたいな話である。『枕草子』に登場する猫は、馬の命婦が乳母として任命されていることから、その際に生まれた子猫（雌猫？）の一匹と見るのが妥当であろうか。ただし成人していなければ「命婦」の職掌は与えられないはずなので、母猫の可能性も存する（猫の成人を考えると自体が愚かしいことかもしれない）。

宮中における産養（うぶやしなひ）となれば、本来は皇子誕生に際して行われるものであろう。あるいは道長は、来るべき定子の出産を牽制するために、一条天皇の皇子誕生に擬した猫

の産養を企画したのかもしれない。それにしても誕生した猫(一匹か複数か未詳)に乳母(馬の命婦)が付けられるというのは前代未聞のことである。ここに道長の権力誇示を読み取ることもできる。そのことに對する藤原実資の批判と慨嘆は大変なものだった。そのためかどうか、肝心の道長はこの件を自らの日記『御堂閨白記』には一切書き残していない。<sup>(2)</sup>

## 二

さて翁丸の事件は、その猫の産養から半年後の長保二年(一〇〇〇年)三月頃のこととされている。それは回想されている三月三日の記事からそう遠くない頃と判断されているからである。この話から、当時既に二十歳を超えていた一条天皇の幼児性を看取することもできそうである。馬の命婦に命令されて猫に吠えかかった翁丸に対して、一条天皇は犬を打擲させた上で鳥流しの刑に処している(殺せとは命じていない)。ここから私は、例の実方と行成の一件を投影して読みたい衝動にかられる。この場合も必ずしも公平な裁きではないからである。大伴氏はここに王権を読んでおられるのだが、むしろこれは一条天皇の私憤に近いものではないだろうか。一般には聡明とされ

ている一条天皇だが、その裏面(恥部)が暴かれている、という読みも面白いのではないだろうか。

もちろん両者の身分差からすれば、地下人の犬が殿上人の猫に吠えかかったのであるから、平安朝の身分制社会では決して許されない(許してはいけない)ことであつた。ただし犬はただ吠えかかっただけで、實の子の上に登って室内まで追い回したわけではなさそうである。だからギリギリの秩序は保たれていたと見たい。なおここまでの事件の経緯は、朝餉の間近辺で起こったことなので、必ずしも清少納言が直接見聞したものはあるまい。ここに伝聞が混じっていることにも留意しておきたい。

ここで一条天皇の命令を遂行しているのは側に仕える藏人達であり、さらにその直属の滝口に犬を追放させている点、やはり公的(正式)な裁きではなかったことが見て取れる(勅書も出されていない)。藏人の仕事に犬を打擲することなど含まれているはずはあるまい。藏人はあくまで天皇の私用で動いているのである(とすると、象徴としては天皇自身が犬を打擲していることになる)。

この犬の追放で一件は落着いたかに見えたが、なんと翁丸は



数日後に内裏に戻ってきた。そこで藏人達は、任務を遂行するために再度打擲したのである。犬は死にそうな目にあわされながら、それでも律儀に古巣に戻ってきたのである。流罪になつた者が勅許を得ずに戻ってきたという点で、ここに例の藤原伊周の一件を投影して読むことも可能であろう。<sup>(4)</sup>

ところで改めて本文を分析してみると、猫はあくまでただの猫であり、馬の命婦の言うことなど一向に聞こうとはしなかつた。それに対して翁丸は、いかにも命婦の「翁まろ、いつら命婦のおとど食へ」(39頁)という命令を理解しているかのよう(5)に、それに忠実に従っている。これを重視すれば、一番の罪人は理不尽な命令を出した馬の命婦ではないだろうか。まさか犬が飛びかかるとは思わなかつたのかもしれないが、少なくとも乳母としてこの言動は明らかに失格であつた。あるいは馬の命婦自身、猫の乳母という役に不満があつたのかもしれない(乳母になりきれしていない)。

また後に清少納言が犬に向かつて、  
あはれ昨日翁まろをいみじうも打ちしかな。死にけむこそ  
あはれなれ。何の身に、このたびはなりぬらむ。いかにわ  
びしき心地しけむ。  
(41頁)

と語りかけた際、いかにも清少納言の言うことを理解したかのよう(6)に、「この居たる犬のふるひわななきて、涙をただ落しに落す」(41頁)と泣いているところも同様である(擬人化)。さらに「さは、翁丸か」と呼びかけたところ、「ひれ伏して、いみじう鳴く」(42頁)と続いており、清少納言の発言をちゃんと理解している(ように振舞っている)ことにも留意したい。ひよつとするとかなり利口な犬ではないだろうか。

### 三、

そもそもこの犬は、一体誰の飼犬なのだろうか。「よろづの犬とぶらひに見に行く」(40頁)とある点、宮中には何匹もの犬が放し飼いにされていたことになる(他に同様の記述があるのかどうか未詳)。獵犬としてきちんと訓練を受けた犬であれば、おそらく主人ではない馬の命婦の命令に従うことはあるまい。そうするとこの犬の主人は誰なのだろうか。そのヒントは右近の内侍の存在である。犬の検分に呼び出された右近の内侍は、「右近ぞ見知りたる。呼べ」(40頁)とあることから、誰よりも翁丸のことに詳しいという設定(世話係?)になつてゐるからである。

ところが、その右近でさえも区別できないほどに犬の顔が腫れ上がって変形していたし、また恐怖からか名前を呼ばれても反応しないということで、内侍は犬が翁丸かどうか判断できなかつた。すでに打ち殺されたと信じこんでいたのかもしれない。それにしても「死にければ、陣の外に捨てつ」(40頁)と排除されたはずの犬が、生きてその場にいるというのも奇妙である。ここに情報の錯綜・不確かさが窺える。あるいは右近にしても、本当は翁丸であることを知りながら、真実を告げずに隠蔽したのかもしれない。

もう一つのヒントは、二度も打擲された翁丸が、清少納言のとうか定子のそば近くに舞い戻っていることである。清少納言にしても定子にしても、翁丸のことをかなり知っているようなので、あるいは直接ではないにせよ、定子に飼われていた犬という可能性も棄てがたい。そのことは清少納言の、

おもいのをりは、かならず向ひさぶらふに、さうざうしうこそあれ。(40頁)

という発言からも察せされる。

だからこそ「御厩人なる者」が進んでいるのだし、それに応じて「制しにやるほどに、からうじて鳴きやみ」(40頁)と

やめさせているのではないだろうか。では定子は、何故一条天皇に許しを乞わなかつたのだろうか。その点にこの章段の最大の謎が存するのかもしれない。あるいは猫と犬の争いの背景には、一条天皇と定子の不和というゆゆしい問題が秘められているのかもしれないからである。

さて二度目に打擲された夕方には、人間不信からか呼びかけに応じなかつた翁丸だが、翌日になると清少納言の呼びかけに涙を流して応じている(犬が涙を流すかどうかは疑問)。正体がばれたら、またひどい目にあうかもしれないのだから、ここが話の最大の見せ場(クライマックス)だと思われる。清少納言にしても、犬の正体を暴くことは危険な賭けではなかつたのだろうか。そうすると、本来ならそこにいた人々は全員もらい泣きしてもおかしくなろう。ところが奇妙なことに、定子は「おち笑はせたまふ」(42頁)とあり、右近も「笑ひののしる」(42頁)し、一条天皇までが、

あさましう、犬なども、かかる心あるものなりけりと笑はせたまふ。(42頁)

と笑っているではないか(笑いの連鎖)。ずいぶんかわいそうな内容なのに、この笑いは一体どういうことであろうか(ただ

し周囲が笑いの渦に巻き込まれているのに、清少納言だけは笑っていない。

もちろん一条天皇が笑うことで、犬の勸勤が許されることになるのだが、それでも違和感をぬぐい去れない。これを安易に文芸観念としての「あはれ」と「をかし」といった高次元に昇華させることは危険であろう。ここに用いられている「あはれ」は、レベルの低い同情に近いものであるから、慎重に質の吟味を行うべきである。

## 結

以上、翁九章段を総合的に分析検討してみた。ここでは犬が人間のように泣く所作が、かえって滑稽化されていると読めうである。もしそうなら、「啼く（鳴く）」に「泣く」の掛詞が成立していることになる。いやもつと積極的に、「啼く」ではなく「泣く」を採用すべきであろう。翁丸は人間の言葉を理解し、その上、人間のように泣くこともできる特別の犬だったのだ。ただしその評価は「道化」でしかなかった。

あらためてこの章段全体を見直すと、清少納言の一番の手柄は、やさしい言葉をかけて犬の正体を暴いたことであろう。そ

れが「つひにこれを言ひあらはしつること」（42頁）であった。それに呼応するかのように、清少納言自身も末尾において「あはれがられて、ふるひ鳴き出でたりしこそ、世に知らず、をかしくあはれなりしか」（43頁）と記している。これ以降、猫の命婦も翁丸も二度と『枕草子』に登場することはなかった。この一件で、一条天皇の猫狂いは収まったのかもしれない。そのため馬の命婦がその後どうなったのかもわからないままである。あらためてじっくり『枕草子』を考える機会を与えて下さった大洋氏に、心からお礼申し上げたい。

### 〔注〕

（1）そもそも内裏で猫が出産したとなると、それは血の穢れになるはずである。人間（女性）でさえ里下がりして出産しているのだが、何故かここでは穢れの問題については一切言及されていない。

（2）有名な道長の「この世をば」歌にしても、『御堂関白記』には記載されておらず、『小右記』にやや批判的に記載されている。この猫は、一条天皇後宮で寵愛されている定子に対抗するために、道長が考案した秘策なのかもしれない。小嶋菜温子氏は、猫の産養から二ヶ月後の敦康親王の産養を無化す

るといふ読みを示しておられる(「一条朝の珍事、猫の産養」——「后並立の裏面史」——『源氏物語の性と生誕』立教大学出版会・平成16年3月)。あるいは猫は彰子であり、犬には定子の運命が象徴されているのだろうか。

(3) 『古事談』一三二には、実方と行成が宮中で口論になり、実方が行成の冠を投げ捨てた話が出ている。それをこっそり見ていた一条天皇は、行成を蔵人頭に就任させ、実方を「歌枕見て参れ」と陸奥守に左遷している。

(4) 稲賀敏二氏は「一篇の構成は翁丸の話に焦点をしばって、清女としては珍しい緊密な構成を示しているけれども、追放された翁丸が立ちもどって来るのと伊周・隆家兄弟の事件の時、左遷追放された伊周がひそかに上京して都へ潜入してとらえられた経緯との対比が、この翁丸を描く時の清女の心裏をふとかすめるというような事が、確かにあったに違いないと私には感じられる」と述べられている(『枕草子大鏡』尚学図書・昭和55年5月)。

(5) 小森潔氏は、それを伊周の身代わりとしての「供儀」として読み解いておられる(『枕草子の祝祭的時空——「供儀」としての翁丸——』『枕草子逸脱のまなざし』笠間書院・平成10年1月)。その上であらためて翁丸に伊周の悲劇が投影されていることを論じられている。

(6) そう考えれば、翁丸は死と再生を果たしたのではなく、誤っ

た情報によって何度も殺されたことになる。そうなると大江氏の主張される「転生」という読みも、誤解に基づく解釈ということになる。そもそも宮中で犬が殺されたら、それも間違いなく死穢になるはずだからである。

(7) 三田村雅子氏は、そこに一条天皇と定子の対立を読み取っておられる(「ウチ」と「ソト」——空間の変容——『枕草子表現の論理』有精堂・平成7年2月)。後見を失った定子の立場は意外に弱かったということである。

(8) 「おち」を「落ち」とするか「怖ぢ」とするかで解釈が揺れている。それだけでなくこの章段には「たれもの(三三)・しれもの(能)」、「朝餉の御前(三三)・朝餉の間(能)」、「いとあさましきさは(三三)・いとあさましきさは(能)」、「あへず(三三)・あらず(能)」、「げに(三三)・さぶらふに(能)」、「さ」とにや(三三)・まことにや(能)「など、やっかいな本文異同が少なからず生じていることも重要であろう」。

(9) 藤本宗利氏は、「をかし」以上に多用されている「あはれ」と「死」から、そこに中間白家の衰退を読み解いておられる(『日記的章段の新黙の構造——「上」にさぶらふ御猫は」をめぐって——』『枕草子研究』風間書房・平成14年2月)。この章段で一番用例が多いのは、もちろん「犬」(「犬鳥」をいれて十二例)である。「翁丸」だけでも八例認められる。

葵祭 —— 賀茂の例祭と車争い ——

## 一、賀茂神社の例祭

『源氏物語』葵巻の見どころの一つと言えば、なんといつても葵祭見物における葵上と六条御息所との「車争い」があげられるだろう。この葵祭というのは、旧暦四月の中の酉の日に行われる賀茂神社（現在は賀茂別雷神社〔上賀茂神社〕）と賀茂御祖神社（下鴨神社）に別れている）の例祭である。

賀茂神社は、本来は地方豪族たる賀茂原主の産土神うぶすまがであったが、平安京遷都後に都城鎮護の神という役割を付与され、朝廷から厚い信仰を受けるようになった。そのため嵯峨天皇の御代に至って、伊勢の〈齋宮〉にならって賀茂の〈齋院〉が設けられ、弘仁元年（八一〇年）に有智子内親王（嵯峨皇女）が初代齋院に任じられている。それ以来、土御門天皇の御代の礼子内親王（後鳥羽院皇女）に至って廃絶するまでの期間、計三十五人・四百年の長きに互って続けられてきた。その中では選子内親王（大齋院）・式子内親王（萱齋院）・祿子内親王（物語合）などが文学史的に有名である。

もちろん葵祭そのものは神社の祭礼であるから、齋院の廃絶

以後も続けられたが、それも応仁の乱によって文龜二年（一五〇二年）以後中絶してしまった。それが江戸時代の元禄七年（一六九四年）に約二百年ぶりに再興されたものの、明治三年以降再び衰退し、同十七年によく旧儀が復興されて今日に至っている。祭りのほとんどはこうした歴史をたどっているのである。

現在は觀光行事の要素が付加されたことで、新暦の五月十五日に祭日が定められており、京都三代祭（葵祭・祇園祭・時代祭）の一つとして賑わいをみせている。また勅使が派遣される日本三代勅祭の一つ（春日祭・石清水祭〔南祭〕・葵祭〔北祭〕）でもあり、平安時代において単に「祭」といえば、この葵祭を意味するほどに有名であった。

ところで、誤解している人も少なくないようだが、「車争い」が起こつたのは決して祭の当日ではなかった。それは、祭以前の午うままたは未ひつじの日に行われる齋院御禊の日のできごとなのである（これも復活している）。

## 二、齋院御禊の日の「車争い」

葵巻は「世の中変りて後」（新編全集17頁）と始められてい

る。この冒頭の一文によって既に桐壺帝が讓位し、朱雀帝が新帝として即位していることがわかる。その天皇交替に連動して、

・まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮、齋宮にあたまひにしかは、  
(18頁)

・そのころ、齋院もおりあたまひて、后腹の女三の宮あたまひぬ。  
(20頁)

と、齋宮と齋院がともに交替となり、新たに六条御息所の娘(後の秋好中宮・女王)が齋宮に、弘徽殿腹の女三の宮(内親王)が齋院にそれぞれ卜定ぼくじょうされている。<sup>(1)</sup>つまり葵巻に描かれる葵祭は決して単なる祭礼ではなく、朱雀帝が即位した最初の行事であり、また新齋院にとつても初度の奉仕ということになる。そのためか、

限りある公事おんはやくごとに添ふこと多く、見どころこよなし。

(20頁)

と、例年よりも趣向が加えられているのである(この折には過差かき(贅沢)の取り締まりなどはなかったであろう)。

中でも朱雀帝の「とりわきたる宣旨」(21頁)によって、光源氏(当時、宰相兼右大将)が御禊の行列に供奉くぶする参議の一人に指名されている。これは行列を盛り上げるための特別な

からいであるが、大将という重々しい源氏の職掌からすれば、格下の不名誉な役目を仰せつかったことにもなる。源氏本人にとつてみれば素直に喜べるものではなく、いやでも衆目の前に自らの姿をさらさざるをえないものであった。

そこに朱雀帝新体制(右大臣一派)による源氏の臣下としての据え直しが密かに、だが確実に行われていることを読み取りたい。そのことは源氏だけでなく、源氏に従う隨身に関しても、大将の御かりの隨身に殿上の将監などのすることは常のことにもあらず、めづらしき行幸などのをりのわざなるを、

今日は右近の藏人の将監せう仕うまつれり。

(24頁)

と断り書きされていることから察せられる。これは単なる齋院御禊の行列であつて、決して行幸などの特別な儀式ではないのだから、仮の隨身となる右近の将監にとつても格下の役目であり、必ずしも名誉な役目ではなかったに違いない。もうおわかりだろう。ここにおける右近の将監は、まさに光源氏の分身であり、また象徴でもあつたのだ(おそらく美男子だったのである)。

しかもこの一件によって、右近の将監は完全に源氏側の人間という烙印を押されることになる。そのため後の須磨流謫の折

には官職を剥奪され、やむなく側近の一人に加わって一緒に須磨へ下向している。そういつた政治的なかけひきを背後に含みながら、齋院の御褌が表向き盛大に行われていることに留意しておきたい。

さて御褌という儀式は、正式には賀茂川で行われるものよ  
うであるが、現在では賀茂神社内の御手洗川（池）で行われて  
いる。それが終わった後、齋院一行は一条大路を通って紫野の  
齋院に入るわけだが、その行列見物のために一条大路には棧敷  
が設けられる。さらに大路には立錐の余地もないほど物見車が  
立ち並ぶ。身分の低い人々は立ったままで見物していたよう  
である。今回の行列のメインは、新齋院ではなくもちろん我らが  
光源氏であり、その美しい姿を一目拝もうと、わざわざ遠国か  
らも連れ添って見物にやってきていた。その意味では源氏起用  
は大成功したことになるが、肝心の新齋院に関する描写が一切  
見られないことにも留意したい。

### 三、祭の日の「車争い」

葵上と六条御息所との「車争い」は、そういった特別な設定  
の中で起こっているのである。源氏の晴れ姿が見られるとあつ

て、源氏とかかわりのある女性達は競って見物にやってきてい  
た。あの朝顔の姫君さえも、父式部卿官と一緒に棧敷からこつ  
そり見物していたことが記されている。後から突然やってきた  
葵上一行は、準備不足で場所の確保もしていなかったのである  
が、そこは左大臣家の地位と権力に物を言わせて、身分低そう  
な牛車を立ち退かせることになる。その行為についての良心の  
呵責などは一切認められない。たまたまそれが六条御息所の  
網代車あじろぐまだったというわけである。

葵上の供人達は酔った勢いもあって、とうとう立ち退きを拒  
否する御息所の車を乱暴に押しつけてしまった。つまりこの  
「車争い」は、正確には「車の所争ひ」（場所取り）なのである。  
それは葵上方による一方的な乱暴狼藉なのだが、もちろんそれ  
を正妻と妾妻の争いの喩と見ることも可能であろう（左大臣側  
の政治的あせりもあるか？）。そしてこの時の屈辱的な敗北が、  
御息所の生霊を誘発する契機となり、物語は葵上の死（両者共  
倒れ）へと展開することになるのである。

この紫野の齋院は、建暦二年（一一二二年）に廢絶された後、  
はつきりした所在地はわからないままになっていたのだが、近  
くに有栖川が流れていたことだけは確からしい。そこで角田文

「衛氏は諸文献を考証された上で、現在の七野社（樸谷七野神社）周辺を紫野斎院の敷地に比定しておられる<sup>3</sup>。一度は見学に行つてほしい。

さて葵祭の当日、斎院一行はその紫野斎院から出発して賀茂神社へと向かうが、その日も一条大路は見物人で賑わっていた。御禊の折は一行に供奉した源氏であったが、祭の当日はなんの役にも当たっていなかった。そこで今度は紫上と一緒に祭見物に出かけている。源氏も葵上同様に場所取りをしていなかった。近衛の馬場殿あたりでどうしたものかと思案していたところ、幸いにも老女源典侍から絶好の場所を譲ってもらふことになる（どうして源氏の牛車とわかつたのかは謎）。

面白いことに、ここでも物語は肝心の斎院の行列のすばらしさについては何一つ描写しておらず、源氏と源典侍との応酬ばかりに筆を費やしている。やはり光源氏こそが物語の主役なのであって、葵祭も単なる風景の一つにすぎないということである。そのためか、翌日の還立の儀（祭のかへさ）などまったく言及されていない。実はこの祭で最も重要なのは御阿礼の神事（神迎の儀）であるが、これは闇の中で密やかに執り行われるものなので、一般の人は今でも見物できない秘儀である。

#### 四、もう一つの「車争い」

なお葵祭の「葵」とは、もちろん桂と合わせてかざしに用いられる植物のことである。もっぱら二葉葵（別名賀茂葵）が用いられており、そのために葵祭という別称が生じたわけである。ただしその言葉の初出は新しく、どうも近世を遡りえないようである。

しかもこの葵は、徳川家の三葉葵と通じるところから、徳川家がいかに自家の祭であるかのように思わせるため、葵祭という呼称を積極的に広めたという説もある。また葵には、掛詞として「逢ふ日」という恋愛的意味が内包されている。葵祭の当日、源氏と源典侍の間で交わされた和歌に葵が詠み込まれていることにより、それが巻名になったという次第である（「葵上」という後人による人物呼称もこの葵祭に由来する）。

源典侍は、源氏が誰か特別な女性と牛車に同車していることを咎める歌を詠じているのだが、その女性こそは紫上であった。先の御禊の日の「車争い」が、葵上と六条御息所の対立であったのに対して、祭の当日の「かざし」争い（30頁）は、源典侍と紫上の対立（世代交代・いわばもう一つの車争い）であった



ことになる。こちらは源典侍からの一方的な歌による攻撃であったが、紫上の正体は最後まで知られておらず、まして場所まで譲ってもらったのであるから、形式上は紫上側の勝利であった。

この一件で敗北した源典侍物語も終了となり、物語から退場する(朝顔巻再登場の折は既に厄になっていた)。そうすると、巻の後半に用意されている紫上の新枕(まさくに「逢ふ日」)は、既にこの一件の中に暗示されていとも読める。それこそが葵という巻名の真意なのではないだろうか。

現在の葵祭は完全に観光行事化しており、必ずしも平安朝のままではなかった。しかしながら、もともと葵祭見物は当時も娯楽の一つであったのだし、「車争い」にしてもフィクションなのだから、是非とも一度は葵祭を見物していただきたい(ただし雨の降る確立も非常に高いので要注意)。行列の華麗さと見物人の賑わいの中に、ふと「車争い」の喧噪が幻視されるかもしれないからである。そういった行列の雰囲気大切にするために、行列に参列する人はイメージを壊さないように、せめてメガネくらいはずしてほしい(気を遣ってほしい)と願わないではいけない。

#### [注]

(1) 本来、齋宮と齋院では齋宮の方が重要なはずであるが、遠方の伊勢へ身内の内親王を派遣するのはしのびなかったのか、帝と縁の薄い女王が卜定されることも少なくなかった。ここでも身内の女三の宮が齋院となり、女王である六条御息所の娘が齋宮に卜定されている(女一の宮はそのまま)。なお選子内親王は帝が譲位しても齋院を退下していない。吉海直人「齋宮」と平安文学『源氏物語の新考察』(おうふう)平成15年10月参照。

(2) 吉海直人「右近の将監」『源氏物語の新考察』(おうふう)平成15年10月参照。

(3) 角田文衛氏「紫野齋院の所在地」『王朝文化の諸相』(法蔵館)昭和59年7月参照。

『和泉式部日記』の端役達

#### 一、問題提起

『和泉式部日記』には、中心人物たる和泉式部と敦道親王の他に、小舎人童・右近の尉・桶洗童・侍従の乳母といった端役達が登場・活躍している。しかし従来の研究においては、端役

であること、記事が少ないことなどによって、その存在はほとんど看過されてきた。ところがそういった端役達に視点を移してみると、意外に興味深い問題が浮上してくる。<sup>(1)</sup>その点について少しばかり私見を述べてみたい。

もともと童は一人前ではなく、正式に元服・裳着をしていない半人前のことである。そういった人々は、人の目にさらされる仕事に携わることが多かった。文使いをしたり、簀子にいたり、前裁に下り立ったりと、人目につく外向きの仕事に従事するのが役目なのである。だからこそかえって主人の分身・象徴的存在となることもあった。

## 二、小舎人童と右近の尉

まず親王側の小舎人童(必ずしも少年ではない)と右近の尉(乳母子の可能性あり)であるが、「故宮にさぶらひし小舎人童」(新編全集17頁)・「すべてよくもあらぬことは、右近の尉なにがしがし始むることなり。故宮をも、これこそみて歩きたてまつりしか」(30頁)とあるように、両者ともに敦道親王に仕える以前に、兄の為尊親王の従者であったことが記されている。おそらく二人は為尊親王の私的な従者であり、そのため親

王の死によって失職したのであろう。もともと「右近の尉」は公的な官職なので、下級公務員であることに変わりはあるまい。しかし当時は公的な宮仕えをしながら、一方で私的に高級貴族の家司を兼ねる(二君に仕える)ことが普通に行われていた。だから主人たる為尊親王を失ったことは、二人にとって特に小舎人童にとつては大きな経済的打撃だったはずである。

そのためか、案外すんなりと弟の敦道親王に主人替えしているのだが、日記ではそれを「いとたよりなく、つれづれに思ひたまうらるれば、御かはりにも見たてまつらむとてなむ、帥宮に参りてさぶらふ」(17頁)と、精神的な慰めであることを強調している。しかしことはそう単純ではあるまい。同腹とはいえ、高級貴族は必ずしも兄弟が親しく交流しているとは限らないからである。つまり兄の従者だったからといって、それだけで弟が安易に雇ってくれるはずはないのである。

そう考えると、二人が敦道親王に雇われたのは、結局プライベートに和泉式部との仲介ができる人物だったからということになりそうだ。二人もそれをセールスポイントにして売り込んだであらうし、敦道親王にしても決して情にほだされたのではなく、やはり和泉式部に接触する手だてとして利用しよう

思つたに違いない（双方の利害が一致！。「日ごろも御文取りつぎて参らする右近の尉なる人」（20頁）という一文が、そのことを如実に物語っているのではないだろうか。しかし石山寺まで往復したり、一日に何度も手紙の使いをやらされたりと、宮仕えは決して楽な仕事ではなかった。

なお和泉式部が敦道親王に引き取られてしまうと、再び仲介役の二人は用なしになつてしまふ。その後あつさり解雇されたのか、それとも恩賞として引き続き雇用されているのか不明だが、少なくとも日記からは姿を消していることを付け加えておきたい。ここで解雇されなくても、遠からず敦道親王が亡くなるのだから、その折にはもう一度失職することにならう。

### 三、桶洗童をめぐる

次に和泉式部側の桶洗童について検討してみたい。「桶洗」とはいわゆる便器（おまる）掃除のことであり、役職としてはかなり卑しいもののように思われがちである（『源氏物語』などには登場すらしらない）。しかしことが人間の生理現象だけに、どうしても必要不可欠なものであり、そのため主人からは案外大切に扱われるようである<sup>(2)</sup>。また童といっても、必ずしも幼少

というわけではない。牛飼童などと同様に、その職掌上便宜的に「童」と称されるだけで、これも年齢的には立派な大人と思われる（しかも美人？）。

この桶洗童は「小舎人童来たり。桶洗童例も語らへば」（39頁）とあつて、どうやら小舎人童と仲が良いらしいが、私は一歩進めて愛人関係にあると読みたい（兄妹ではあるまい）。つまり小舎人童は、おそらく為尊親王のお供で通つたり手紙を届けたりしている間に、取り次ぎをしていた桶洗童と情を通じたのである。もちろん為尊親王の死後も私的に通い続けるわけだが、そういった個人的都合もあつて弟の敦道親王を積極的に仲介し、今度は敦道親王のお供、あるいは手紙の使者として、堂々と桶洗童に通つていふと考えてみたい。

このように自分の恋の便宜のために、主人の恋の仲介を行っているとしたら、当時の下級階層の人々もなかなかしたたかに生きていることになる。そのことは『落窪物語』の帯刀や、『堤中納言物語』の「ほどほどの懸想」に登場している小舎人童とも共通している。

なお深読みかもしれないが、この桶洗童は「桶洗童して、「右近の尉にさし取らせて来」とてやる」（37頁）ともあり、ど

うも右近の尉とも親密なようなので、三角関係だったかもしれない。そう見た方が、恋多き和泉式部の分身としてもふさわしかろう。

#### 四、侍従の乳母について

一方、侍従の乳母の存在は重要である。乳母論の常識からすれば、男（養君）が結婚などによって独立する時に、乳母とも別居することになるのであるが、敦道の場合は親王ということで、妻（北の方）を邸に迎え入れている。そのために乳母との同居も継続しているようである。もし敦道親王が立太子することにもなれば、この乳母にとつても法外な利益になる。

面白いのは、乳母の発言力が非常に強いことであり、成人した敦道が煙たいと感じつつも、乳母の言うとおりに思考している点である。和泉式部を召人とする考えも、乳母の「召してこそ使はせたまはめ」（30頁）という発言あつてのことだった。だから今もつて「よろづのことはただ御乳母のみこそすなれ」（57頁）という状態なのである。

このような姑よりも始末の悪い乳母がいつまでも側にいたのでは、和泉式部もさぞかし大変だったであろう。もつとも日記

では、和泉式部の入居以後、この乳母は一切姿を見せなくなる。あるいはその頃には敦道立太子の可能性も消失し、そのために乳母も見限つて離反したのかもしれない。もしそうなら裏切る乳母ということになるが、単に便宜的に登場させられていないだけかもしれない。

ついでながら宮仕えについて一言述べておきたい。敦道親王の邸を例にすると、まず親王付きの女房が複数いる。侍従の乳母しかり、また宣旨という腹心の女房（乳母子か）も登場している。それに対して北の方にも独自の女房圏があり、やはり北の方の乳母を筆頭にして、中将（敦道のお手付き女房（召人）か）などの名が見えている。そこにさらに和泉式部が割り込むわけだが、もちろん単身ではなく、それなりの女房達を伴つてのことであろう。その中には前述の桶洗重も含まれているに違いない。

このように二人の恋愛が生じると、必然的に一人の主人を円を中心とする複数の生活圏が、否応無くひしめきあうことになる。そういった末端の動向というか、端役達の活躍に目を向けることも重要ではないだろうか。

[注]

- (1) 端役達の活躍に関しては、千葉千鶴子氏「『和泉式部日記』私見——執筆事情をめぐる覚書(二)」「小舎人童」登場の意味——」帯広大学短期大学紀要8・昭和45年12月、磯村清隆氏「『和泉式部日記』の脇役機能——童たちの活躍——」大阪城南短期大学研究紀要25・平成2年12月、大谷裕昭氏「小舎人童」の出現——『和泉式部日記』を中心に——」日本文学誌要45・平成4年3月などの論がある。
- (2) 蟹江希世子氏は「平安朝」童考——物語の方法として——」古代文学研究第二次6・平成9年10月において、「桶洗童」は物語では全て女主人に従事する女の童である。ただし「いづれも文使いとして活躍していて、「桶洗」としての職務は描かれない」と述べている。こういった盲点というかズレが潜んでいることにも十分注意しなければなるまい。
- (3) 吉海直人『平安朝の乳母達』(世界思想社)平成7年9月。

藤原道長の「この世をば」歌をめぐる

「この世をば」歌は、藤原道長の栄華を象徴する代表歌として夙に有名であった(永井道子の小説でも「この世をば」になつてゐる)。ただしその出典に関しては、いささか奇妙な点が存する。というのも、道長はこの歌を日記『御堂関白記』に書き残していないからである。また家集『御堂関白集』にも掲載されておらず、本来なら後世に伝えられることはなかつたはずである。

それは道長の資料のみならず、藤原行成の日記『権記』も歴史物語『大鏡』・『栄花物語』も同様であり、道長近辺の資料には一切この歌が記されていないことがわかる。ではどうして今日まで伝えられたかという点、それは道長を批判的に見ていた藤原実資の日記『小右記』に書き留められていたからである。

二

これをもう少し詳しく述べると、道長は当日のことを『御堂関白記』寛仁二年十月十六日条に、「於此、余読和歌、人々詠

之」と記していた。「余読和歌」とあるので、道長が和歌を詠んだこと、さらに居合わせた人々がその歌をみんなで唱和したことはわかるが、どんな歌を詠んだかまではわからない。

道長がこの歌をあえて日記に書き留めなかった理由については、例えば歴史家の竹内理三氏は、それを単純に道長の照れと見ておられる(「この世をば」歌を日記に書きとめなかった藤原道長」日本古典文学大系茶花物語下月報・昭和40年10月)。しかしながら「この世をば」歌に関しては、道長の照れ云々で解消すべき問題ではあるまい。

たとえ事実として、その日道長の娘の威子が立后したことで、娘三人が三后を独占することになったとしても、そして道長が外戚として君臨していたとしても、この歌の内容は明らかに天皇制に対する不遜な表現(不敬罪)になっていいると思われるからである。道長自身そのことに気付いていたからこそ、自身の日記に書き留めなかったのではないだろうか。

## 三

ここであらためて『小右記』同日条を検討してみたい。

太閤招呼下官云、欲説和歌、必可和者、答云、何不奉和乎、

又云、誇たる歌になむ有るやと、但非宿構者、此世乎ば我世とぞ思望月の虧たる事も無と思へば、余申云、御歌優美也。無方酬答、満座只可誦此御歌、元稹菊詩、居易不和、深賞歎、終日吟詠、諸卿饗応余言数度吟詠、太閤和解、殊不責和、

道長は自分が歌を詠むから、必ずそれに和して歌を詠むようにと実資に念を押している。しかし道長の歌を聞いた実資は返歌をせず、道長の歌を吟詠している。「この世をば」歌は到底優美な歌とは思えないので、実資はなんとかこの場を取り繕って、下手な歌を詠んで道長に同調していたと思われまいように務めたのではないだろうか。

その上で自らの日記にしっかりと道長の歌を書き留めているのである。これは下手をすると道長不敬の動かぬ証拠になりかねない危険な歌であった。なお、この歌をめぐる道長と実資の関係については、田島智子氏「道長詠「この世をば」歌の背景——長和・寛仁年間の道長と実資——」詞林17・平成7年4月に詳しい。

いずれにしても『小右記』に書き留められたことで、今日までこの歌が伝えられたことは間違いあるまい。

#### 四

その後『袋草紙』に「小野宮右府記云」として、

太閤呼下官云、欲読和歌、必可和者、答何不奉和歌。又云、  
誇たる歌になんある。

此世をば我よとぞおもふ望月のかけたることもなしと  
をもへば

余申云、御歌優美也。無方、満座只誦此御歌、元稹菊詩、  
居易不和、深賞歎、終日吟詠、諸卿饗応、余言、数度吟詠、  
太閤和解殊不責和。

と『小右記』があげられているが、ここでは秀歌には返歌をし  
ない例として引用されており、政治的な配慮には一切言及され  
ていない。

それがさらに『続古事談』にも引かれているのだが、

又右大将への給、歌をよまむとおもふに、かならず返し給  
べし。大将、などかつかまつらざらんと申さる。大殿仰ら

るるやう、ほこりたるうたになんある。ただしかねてのか  
まへにはあらずとて、

此世をば我世とぞ思ふもち月のかけたる事もなしと思  
へば

大将申さる、この御歌めでたくて返歌にあたはず。ただこ  
の御歌を満座詠すべき也。元稹が菊詩、居易も和せず、ふ  
かく感じてひねもすに吟詠しけり。かの事をおもふべしと  
申さるれば、人々饗応してたびたび詠ぜらるれば、大殿う  
ちとけて、返歌のせめなかりき。

と漢文から和文に変化している。また微妙に本文に異同がある  
ことから、直接『袋草紙』を引用しているのではなさそうであ  
る（実資が右大将として据え直されている）。

こうして古記録から歌論集・説話集へと「この世をば」歌が  
引用されたことで、後世に残る土壤が形成されていった。もは  
や不敬罪云々とは誰も言わないようである。